

健康教育試論

第2報 生きるよろこびを求めて

山本 万喜雄

(保健体育科教室)

(平成7年9月29日受理)

目 次

はじめに

第一章 生命の力を見いだすとき

1 I was born

2 勝弘誕生記

3 感動によって人は育つ

第二章 病むことも人間を育てる

1 病床からのメッセージ

2 母の病気

3 父のこと

4 心の健康

第三章 生きるよろこびを求めて

1 書くことへのこだわり

2 青年とともに授業をつくる

3 青年たちへの贈り物

おわりに

引用・参考文献

はじめに

新しい年の星野富弘カレンダーには、初々しい水仙の絵に添えられて、次のようなのちある言葉が刻まれていた。

幸せという

花があるとすれば

その花の

蕾のようなものだろうか

幸いという字がある

もう少しで
幸せに
なれそうな気がする

辛いといえば、このところの相次ぐ「いじめ」による子どもの自殺。その悲しいニュースを聞きながら、私はふっと思い出したように心の友に語りかけるのであった。

「まあちゃん、君ならどう考える？」

まあちゃんとは、30年前、自死したクラスメートのこと。舟木一夫の「高校3年生」を歌いながら、死の前日まで一緒にクラブ活動をしていた仲間である。その彼がなぜ死を選んだのか、真相はわからない。しかし、彼のつぶやきをきいていた私には、受験戦争の犠牲者だったのではないかという思いがある。そして死別の悲しみを越えてまあちゃんの母親が言ってくれた言葉が、いまでも耳に残っている。

「まきさん、死んだらおしまいよ。泥棒してでも生きるんよ」と。

ところで、「子どもは自分の苦しみを語らないが、苦しみが深い時には必ず何らかのシグナルを発信している」と言われる。彼が発信していたであろうシグナルとは一体何だったのか。この根源的な問いかけを与えてくれたまあちゃんの志を受けとめて、生きていきたいのである。

こうした辛い体験を持つ私が、いま伝えたいこと。それは、「生きる歓びを感じとるためには、生きる哀しみをもっと知るべきではないか」という山田太一のことばである。震える弱いアンテナを秘めて。そのためにも、私たちは観察力と想像力を磨かなければならない。この両者にはどのような関係があるか。大江健三郎の知性を借りればこうなる。

「観察力をよく働かせうる者こそが、よく想像力を展開しうる者でもある。また想像力を豊かにくりひろげうる者こそが、細部にまでわたって奥行きのある観察力を日々、行使することができるのだ。」

苦しみが伴わないで心が見えるということは非常に少ないようであるが、「待つ」といっても、子どもが動き出すのを我慢するのではない。感性の高揚と理性の持続を尽くしながら、やはり自分自身の生き方を賭けて待つということが大事なのである。

*

この文章は、愛媛新聞（1995年1月11日付）に掲載された拙稿である。昔、炭坑では、鳥カゴに入れたカナリヤを坑内に運び、空気の状況を調べたという。いま、この国では、子どもたちがカナリヤであり、校内の空気の希薄さと汚濁を知らせているような気がしてならない。

こうした状況があるだけに、学校では健康の科学的認識とともに人間らしく生きる価値意識を育てることは、きわめて重要なことだと思われる。健康教育のあり方を模索してきた私が得た結論の一つは、いのちの問題を教えるときは、人間としての生き方全体のなかで有機的具体的に位置づけることが肝心ではないかということである。

さて、第1報では「喜怒哀楽の教授法」¹⁾を報告した。本報では、生き方を考える健康の教育に有効な自主教材を提示しつつ、現代を生きる青年たちへの教育方法について考察することを目的とする。

第一章 生命の力を見いだすとき

1 I was born

芹沢俊介によれば、子どもは根源的に三重に受身であると言われる。三重の受身とは、

- ①この世に生まれてきたこと
- ②自分の選択ではなく誰かを親にもたせられること
- ③どんな身体および性を受けるかも自分の選択ではないこと

子どもがおとなになるためには、この三重の不自由を自ら選びなおすことを意味する。

ところで、詩人の吉野弘は、生まれるということが「受身」であることを「I was born」という作品に表現した。その詩の一部を引用しよう。

「少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は〈生まれる〉ということが まさしく〈受身〉である訳を ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

——やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

—— I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね——

その時 どんな驚きで 父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには 僕はまだ余りに幼なかった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから。」²⁾

この詩のように、私たちはなにも生まれたくて、生まれてきたわけではない。頼みもしないのに、この世に生まれたのである。にもかかわらず、自分の責任でもない生に、すすんで責任を背負おうとする。真実の人生は、そのときにはじまるのである。

ところで、生むことを決意する親の選択がいかに重大なことか。ここに知人のM氏から送られてきた一編の家族新聞がある。³⁾ この勇氣ある文章は、生を問う教材になりうる。

2 勝弘誕生記

「選択」

人は生きている間にその人の一生を左右するような選択を何度か体験します。例えば人生のパートナーを選ぶとか、どこで生活するかとか……そしてその選択が正しかったのか誤っていたのか、答えがなかなか出ないものほど、難しい選択であるように思います。

平成4年12月14日の深夜、正確にいうと15日。私たち夫婦にとって、親として、最も難しい選択をしなければいけない出来事がありました。

それまでお腹の中で順調に育っていた勝弘の頭の中での出血です。年末だからもうそろそろ大事をとって入院した夜の事です。まだ予定日には少し早いので一日でも長くお腹の中にいさせるということで、点滴を打ち始めて少しして、私の方が動悸。手先まで震えるので看護婦さんに言ったけれど、それはこの薬の副作用で誰でもなるとのこと——しばらくがまんをしていましたが、(兄の)よっくんの時もこんなになってすぐやめてもらったことを思い出し、母親に悪いんだから子どもにもよくないって言おうと決心した頃から事態は急変。

赤ちゃんの心臓の音がおかしいので、このまま自然分娩だと死産。帝王切開しても助かる見込みは薄いし、もし助かってもかなり厳しい状態。それでもお腹を切るかどうか主人とふたりで電話で話して決めてくれという医師の言葉に私は悪い夢でも見ているようで……とにかく生きている限りは一秒でも早くお腹から出して治療を……と手術室へ。

夫が来るまではしっかりしておかねばと思ったけれど、勝弘がお腹から取り出された瞬間、私も目の前が真っ白になり意識をなくしてしまいました。

次に目が覚めた時には、夫の顔がありました。沢山のことを言いたかったのに、ひと言、「赤ちゃんは？」というのが精一杯。

生きていることがわかった私が、また眠りについている間にも、病室の外では家族が大きな問題に直面していました。勝弘の頭の中に出た血をとり除く管を入れるかどうか。管を入れても助かる見込みは薄いし、助かっても大脳をほとんどやられているのでかなり重度な障害を残す。言葉を変えれば植物人間のような状態も覚悟しなければならない。

結局、最終的には両親が決めてほしいということで、夫と私は一分でも一秒でも長く生きてほしいと願って、「管を入れてほしい」と言いました。

人が人の命を決めること——そんなことを本当にしてもいいのだろうかと思います。

「可能性ゼロ」への責任

1回目の帝王切開の時の選択は正しかったとすることができるけれど、2回目の選択が正しかったかどうか——その答えを考えると、頭の中が混乱し、今までのいろいろなものが崩れてしまう気がしました。

大脳の回復への望みでもあれば自分たちの支えになると思ったせいか、医師へ何度もたずねました。その度に「脳細胞の回復はゼロです」の答え。3度「ゼロ」の現実が私たちを襲う。

夫とふたり1パーセントもないと断言され、ゼロの可能性に賭けると言ったのは、まぎれもない私たちなのだからとお互い自分に言いきかせるように何度となく話しました。この先はわからないけど、その時々で親としてやれるベストのことをできる親になることが2回目の選択への責任なのだと。

「勝弘の生命力」

しかし、そんな私たちにもっと恐いことが待ち受けていました。それは、いつその管を抜くかということ。出血が止まっていない管を抜くことは、すなわち死を意味することだったので、それには私たちもパニック状態でした。勝弘を生かしてやりたいと思ったのは彼の為でなく、その反対のことをただできない自分たちの為だったのだ——そんなことを感じたり、泣き叫んだりしました。病院でクリスマスソングをいやというほど聞きました。でもそんな時、勝弘の頑張っている姿に励まされ、彼の生命力に負けてはいけないと思いました。夫と散歩したロビーでKANの「愛は勝つ」が流れていました。「信じることさ、必ず最後に愛は勝つ——」その後「ヒロ」をつけ加えて口ずさんでみたりしました。

「勝ちゃんをよろしく」

幸い3回目の選択を私たちはしなくて済みました。医師がこれ以上は入れておけないとい

う時、抜いてくれました。そして奇跡的に出血もおさまりました。その後、医師も驚くほど体力もつきました。

3月15日、生後3ヶ月で退院。勝弘を我が家につれて帰る車の中で、この3ヶ月のことを考えていました。おそろしく長い日々のように感じましたが、今日のようなやさしい気持ちで彼を迎えてやるために、私たち家族には3ヶ月という時間が必要だったのだと思いました。

彼のために家族が犠牲になるのではなく、それぞれが自分を大切にしながら、彼を大切にしてくる生き方がしたいと思いました。

重いハンディを持って生まれてきた勝弘ですが、みんなに育てて頂こうと思っています。どうか皆様ウチの“かっちゃん”をよっくんと同じくよろしく！

3 感動によって人は育つ

重いハンディをもって生まれたかっちゃんのこの誕生記は、私たちの魂を揺さぶる。かっちゃんの生死を決めるギリギリの選択、担当医師からの絶望的な宣告。にもかかわらず、M氏夫妻は懸命の療育に取り組むのであった。光を求める日々、「その子の能力が最大限発揮できるようベストを尽くす」と語る大阪の医師との出会いがあり、最近では、かっちゃんの生きようとする力に、親の方が励まされるということである。

「目を合わすことができなくても、歌を歌って手を打ってやると笑顔をみせるようになりました。今まで左しか向こうとしなかったのに自分から右の方も向き始めました」

かっちゃんのおかげでしをするM氏夫妻とその家族。愛とは、生きとし生けるものの中に生命の力を見いだすときに感じる感動なのであろう。

この母親の手記に対して、二人の高校生は次のような感想を述べた。

「(山本の講演は) なんだかとても人間の暖かさを感じることができました。特に、『勝弘誕生記』は心を打つものがありました。私は五体満足に生まれて、今まで何不自由なく生きてきたのに対し、勝弘君は、生と死のさかいをさまよいながらも頑張っている。そして両親は苦悩の決断をした。人間にはいろんな人がいて、幸せな人も不幸な人もさまざまだけど、皆それぞれ生きるために頑張っている。私はこれから人を見る目が変わりそうな気がします。人はこんなにすばらしいものを持っている事に気付いたからです。」(高3・美由紀)

「今日の講演を聞いて、自分のためになることがたくさんあった。自分が生まれて、今ここにいるのは、両親がいたからこそ。それは言われなくても分かっているけど、よく考えてみると、そのことに対する感謝の気持ちを忘れていた。『生んでくれて、ありがとう』と言ってみたくて、たぶんはずかしく言えないだろう。だから、お父さん、お母さんの喜ぶことをたくさんしてあげようと思う。」(高3・さつき)

魂の技師という形容がぴったりの教師・江口季好は、つねづね「教育とは感動である」「感動によってこそ子どもたちは成長していきます」と語っているが、まったく同感である。

次に、美しい感動の共有によって育ちあう大学生の文章を紹介しよう。

第二章 病むことも人間を育てる

1 病床からのメッセージ

よろこびが集ったよりも
悲しみが集った方が
しあわせに近いような気がする

強いものが集ったよりも
弱いものが集った方が
真実に近いような気がする

しあわせが集ったよりも
ふしあわせが集った方が
愛に近いような気がする

(詩画集『風の旅』⁴⁾から)

この作品を創った星野富弘は大学を卒業後、中学校の保健体育教師として赴任したが、わずか2か月後、クラブ活動の指導中誤って墜落。登山を愛し、器械体操をこよなく愛したスポーツマンは、肩より下がすべて機能がまひするという絶望的な闘病生活の中で、わずか動かすことのできる口に筆をくわえて、文字を刻み絵を描き、自己回生の道を見い出した。その一つひとつの言葉は、人の心をはげしくゆり動かさずにはいられない。

病気といえば、教え子の中に突然の病気で入院した感性ゆたかな女子学生がいた。彼女はけなげにも病床から教育を語るなのであった。忘れられないメッセージの一部を引用したい。

〈私の総括〉 清水礼子

謙虚さを失ってしまったら教師をやめなければいけない。教育実習の時の先生がおっしゃられた言葉が今も心に残っています。私にとって、教育とは何かを考える時、まず最初にかんでくる言葉です。教えることはできても、育てることはなかなかできないように思います。自分サイドだけで物事を考えるのではなく、子供が今、何をしようとしているのか、あくまでも子供を主体として見つめる目を持たなければならないと思います。

からだを病んで、一番こわいことは、心まで卑屈になるということでした。自分が感じている痛みをいくら言葉にしてみても、同じ痛みをまわりの者は感じられない。そのことが私をイライラさせ、人を思いやる心を忘れそうになりました。

そうして、ありのままをみつめながら、ありのままで胸をはって生きることの勇気とその姿の美しさを知りました。地位や名誉など関係なく、みんな、同じ重みの生命を持った一個の人間として、さらけだして生きているこの小さな社会を直視していると、生命の貴さや人間の偉大さよりも、むしろ生きることの醜さやしんどさを感じます。

理想は、時として現実の前にくずれることがあります。けれども、たくさんの理想の中にこれだけは子供に伝えたいことがあります。それは、人の痛みをわかろうとすること。優し

さは同情の延長線上にあるのではなくて、哀しみに耐えた人のほほえみの中にあること。美しいものを美しいと感じる心は、人間だから持つことができるということ。そして生きているものすべてに生命があること。

子供の前ではうそはつけません。ありきたりの言葉でかざりたてた建前はすぐにみやぶられてしまいます。うちの子だけがよければあとは知らない、ではなくて、いつも子供に恥じない生き方をしている私でありたい。肩ひじはらずに、楽に息をしていきたい。あたりまえの生活に慣れ、感じることの少ない毎日ではなくて、絶えず周りの状況を把握しながら、それを心の中で整理しながら子供をみつめていきたい。（後略）

*

さまざまな果たせぬ思いを積み残していく旅——人生。この才能ゆたかな「未来の教師」は闘病生活を耐えぬき、やがて元気になって愛媛大学教育学部を卒業していった。しかし再び病魔が彼女を襲い、帰らぬ人になってしまったのである。美しく輝いた人生とはいえ、23年間という時間はあまりにも短かすぎる。なんとも口惜しい。

大学の授業でこの「病床からのメッセージ」を伝えると、多くの学生は心打たれるようである。後輩の3人は、次のようなレポートを提出してくれた。いずれも1回生。

2 母の病気 (亜希)

先日、長崎に住む母から電話があった。内容は夏休みになったら至急帰ってくるように、とのこと。帰るなら春休みでもかまわないはずなのに、何故5ヶ月も先の事を急に切りだしてきたのか、私は不安が過った。わけを聞くと、入院して手術をしなければならないらしい。病名までは聞かなかったが子宮を摘出するのだという。3週間程の入院になるので、その間の家事を私にまかせたいということらしかった。私はその話を聞き、遠く愛媛で暮らしている自分の境遇を疎ましく思った。すぐ近くに住んでいれば、今からでも様子を見に行けるのに。一本の電話によって私はその夜、母のことを考えつづけた。

母は一度仕事場で大きな事故にあったことがある。その当時、私は小学校4年生ぐらいだった。ある日私が学校から帰ると、手にぐるぐると包帯が巻かれていた。その範囲は手の甲からひじ上にまで及ぶもので、一目見て重傷であることがわかった。その頃、母はクリーニング工場でズボンのプレス作業をして働いていた。ズボンのプレスは今ホテルなどへ行けばよくおいてあるが、板状のものの上にズボンを敷いてその上からサンドイッチのように板ではさんで熱によってしわをのばすというものだ。その工場ではそんな市販のものとはほとんど変わらないが、それよりも二回りほど大きく、かつ蒸気を使ってしわをのばすという違いがあった。母はその機械に手を挟み、蒸気でやけどをしたのだ。クリーニング工場ではじめて3ヶ月もしないうちの事故だったように記憶する。私も小学生だったのでそれで保険金がおりましたかどうか——といった事までわからなかったが、ただわかっているのは、母の腕は今でもずっとやけどの跡が生々しく残っていることと、母は事故の後すぐに仕事をやめてしまったことである。その当時、私はその事実だけを認識したが今になってみると、その工場は大けがをひきおこすおそれが十分にあった。機械の安全性をもっと高めておいてくれなかったのかという追求の念と、そこまでしても家族を養うために、働きつづけている母への感謝の気持ちでたまらなくなる。母は苦しい家計の中でも私を、長崎から愛媛へと心よく送りだしてくれた。それだけでも十分私は恵まれていると思う。しかし、私もこう書くと母に

感謝する娘という図式を思い浮かべさせるだけだが、私は決して母と仲が良いというわけではない。仲が悪いというわけでもない。ただ私は昔からよく母に怒られていた。私は母に反抗心を持つことはあっても、それをいまだ一度たりとて意思表示をしたことがない。母の主張は的をえていることもあったが、単にヒステリーと呼べるものも多々あった。その理不尽さを追求できなかった私は、自分への嫌悪感を母に移していた。母に怒られる時はいつも、彼女に対する悪口や嫌悪感で心の中は荒れ狂う海のようにうずをまいていた。しかし母を憎んでいるというまではいかないものだ。しかし私と母は厚い壁一枚をへだててお互い背をむけた間柄になっている。私は母に相談したこともないし、また母もそうである。母と買い物をする時は楽しい。特に私が一人暮らしをはじめ、食料品関係に少し詳しくなってから行った時は、大根が安いので、里芋でお煮しめつくろうと二人で友達のように騒いだ。いつもあんなふうにいられたらと、あの時は真剣に考えたものだ。

母の夏の手術の話は、私にこれ以上の思い出や感情を思い起こさせた。私は夏帰って母の手伝い、看病、私にできる範囲内すべてをこなそうと思っている。壁はあってもなくても、たった一人の母親。私をここまで病気や事故をくりかえしてでも育ててくれた母をどうして憎むことができようか。母の今回の病気も無理をして働いたためであればその責任は私に十分ある。その母の負担をすこしでも軽くできればいい。もし今度私の中に母へのわだかまりが生じる時があればおそれずにぶつけてみようと思う。そうやって母と娘ではなくて、一人の対等な人間として話をしてみたいと思う。ただ今は、神様に母の病気が完治することを願うだけだ。

3 父のこと (淑子)

私の家族は父・母・弟・私の4人家族で、目立った問題もないごく普通の一般家庭です。でも、私は父が大嫌いです。“娘は父親を嫌うものだ”とよくいいますが、私の場合の大嫌いはそんな半端なものではありませんでした。以前はそう信じていました。

私が父を嫌いはじめたのは、私がまだ幼稚園に入る前（2歳くらい）、ほったたかたかたながら「あいうえお」を覚えさせられたのがきっかけです。それから私は、“きっとこの人は私のこときらいなんだ”と思いはじめ、母と一緒にいないと父と同じ部屋には入れませんでした。というように私は物心ついた時から父のことが嫌いだったのに、父は母に「おまえがわしの悪口を言うから淑子はあんな風にしを嫌うんじゃない」と何かめ事が起こったらすぐに言います。そんなところも嫌いでした。

中3から高1にかけて、私の言葉づかいが悪いのをこっぴどくおこられたこともありました。こぶしでなぐられ、足でけられ、それでも私は反抗して、すごいけんかをしました。その時に父のいやなところを全部はき出し、それからずっと「おはよう」のあいさつまでしなくなりました。

父はすぐどなります。特に母がお金（家計）のはなしをしたらすごい見幕でおこります。父は某銀行の支店長をしており、そのプライドを傷つけられたように感じるからどなるのかもしれませんが、私は、父は母にいつもどこかでひげ目を感じていて、それが爆発してどなるのだらうと思っていました。そのひげ目というのは、母は短大を卒業しているのだけれども、父は高卒であるということです。父は二言目には「わしをバカにしとるんじゃない」と言います。母にしてみれば、そんなことは本当にバカバカしくて、いつもあきれています。

そんな父も私はやはり嫌いで、中学・高校とずっと、父をぬかしてやる、私をいじめた父を絶対見返してやる、そしてこんなうるさい父親の家を早く出て行ってやる、と思っていました。言葉は悪いかもしれませんが、父親への憎しみのために大学受験ものりこえてきたという感じです。でも、言いかえれば父のおかげでここまでがんばってこれた、ということになるかもしれません。

今、遠くにはなれて生活してやっとわかりはじめたことがあります。それは、父のやさしさです。こんなことは恥ずかしくて本人には一生涯死ぬまで言えません。私がこんなに元気に生活を送れるのは、父のおかげだと素直に最近考えられる様になりました。やっぱりお金（仕送り）が一番のやさしさを感じてしまいますが、それよりも他に、あんなにたくさんいやなことを言ったり、無視したりしたのに、私のためにいろいろありがとう、というのが本当に正直な気持ちです。家族が人並に仲良くまとまっているから、私も何の不自由もなく、安心して暮しができるのだと思います。母は私の相談相手、弟は私を姉としてしたってくれる、そして父は私の生活すべてを見守ってくれる。私にはこんなすばらしい家族がいます。

4 心の健康 (佐知代)

私は今、非常に健康です。丈夫です。はっきり言って病気らしい病気にかかったことがありません。こんな私でも気をつけていることがあります。それは、心の健康です。健康というのは体の健康だけでは健康とは言えないと思うのです。私の心の健康は、クヨクヨしないこと、終わったことをいつまでもこだわらないことです。でも、昔からこうだったわけではありません。

私の家は夫婦仲、嫁姑仲が非常に悪い。私は物心ついたころから両親のケンカを見て育ちました。共に短気で細かいことにこだわるので衝突してしまうのです。おまけに父は腹が立つと茶碗だろうが一升瓶だろうが投げ、さらに母に対して暴力をふるうのです。ける、なぐる、引きずりまわす。すさまじい光景です。幼い頃、仲裁にはいった私は何度投げとばされたことか。それまで何度も何度も父にくっついてかかったものです。4つ下の妹がまだ母に負われている頃、思いつめた母に手を引かれ、真夜中に海を前にして母に「一緒に飛びこもう」と言われたことがありました。その時は私の「ばあちゃんどこ行こう」という一言でふみとどまりました。両親のケンカの最中、包丁がとびだしたこともさえます。

さらに私は最悪の状況の中で高校入試を受けました。高校入試の最終日、両親は別居、私と妹は母の実家にうつりました。それから母は精神的にまいってしまって寝こんでしまいました。それでも父方の仕打ちはきびしく、養育費も生活費も出してもらえず、私の貯金で暮らしました。さらに父方の親せきから一方的に責められ、ますます追いこまれた母は、医師からもらっていた精神安定剤（睡眠薬）を大量に飲み、自殺をはかりました。幸いにも致死量にはいたらず母は2日間ほど眠り続けました。意識がもどってもそれから1日程の記憶が母にはありません。薬の完全にぬけていない力のない体で家の中を歩き回り、転倒したり階段から落ちたり、人が変わったようにパクパク食べたり、ショックでした。(中略)

3ヶ月後、話し合った結果、どうにか元の型にはもどることになりました。これらのことがあって私は強くなりました。いろいろ思い悩んでいた私ですが、高2のころから少しずつ考え方を変えられるようになりました。心の健康です。このことに気付かない両親は今でもケンカをしています。

今まで絶対的に暴力をふるう父が悪いと決めつけていましたが、考え方が変わりました。ケンカというのは片方だけではおこらない、両方に原因があるからおこるのだ、どちらも悪い。そして私たち姉妹が片方のかたをもつから悪化するのだ、とりあわずに、2人で勝手にさせておけばよいのだ、と思うようになりました。今でも私にグチをこぼす母ですが、言いたいだけ言わせて聞き流すことにしています。こんな両親をそれまでは批判的に見てきました。決して手本のような両親とは言えませんが、それでも私の両親です。今では、良い経験をさせてもらったと思っています。このような考え方ができるようになるのに17年かかりました。これで精神的に楽になりました。毎日が楽しくもなりました。まだそれができない妹は苦勞しています。いつもあっけらかんとしている私からは今までの話が想像できないらしく、この話をした親友からは信じられないと言われました。これでいいのだと思っています。

17年かけて見つけた心身の健康。今では、同じ年齢の人達より多くの人生経験、社会勉強をしたことを得たような気持ちさえ持っています。あとは妹です。いつのころからか妹の気持ちを確かめたり納得したりするのは私の役目となり、一緒に住んでいる母は妹の気持ちをきくために、わざわざ松山にいる私のところに電話をしてくる。私が元気だからでしょうが、「元気？」とか年頃の娘をもつ親が言うようなことは一切言わず、言うのは専ら、両親・妹の頼み事ばかりです。両親に言わせると「あんたは、ほっといても心配ない」のだそうです。果してこれは信用されているということなのでしょう。おかげで門限も束縛もなく自由にやりたいことをさせてもらっています。この冬、文字通り元気な私は風邪もひかず、身心共に健康で充実しています。どうせ同じ時を過ごすなら、楽しく生きたいと思いませんか？

*

学びを通して、自分の人生を肯定していく学生たち。彼女らは新しい世界を知り、仲間とつながり、新しい自分を見つけていく。もちろん、自分がその親たちから生まれたことを肯定するには、時間も契機も必要であろう。「病床からのメッセージ」のような教材は、人生への勇気を触発させてくれるのである。

第三章 生きるよろこびを求めて

1 書くことへのこだわり

1974年以来、教師養成教育にかかわってきた私は、「書くことは考えること」ということにこだわっている。なぜ、そんなに書くことにこだわるのか。もしかしたらサークルで育てられてきた私の中に、生活綴方教育の伝統が流れているのかもしれない。

生活綴方といえば、詩をつづる教師・深澤義旻は、次のような作品を書いている。⁵⁾

鉄筆のうた

ふかざわ よしあき

ものをかくことへの抵抗は、自分をさらけ出さなければならぬところからくる。ものをかくことのくるしさは、自分をごまかすことのできないところからくる。ものをかくことのつらさは、自分の思考をまとめることの未熟さを思い知らされるところからくる。

だが、人間の人間であることの尊厳を失わないためには、こうしたことに耐えなければな

らない。

人間は自らの意志で、自分を昨日とちがった人間につくりかえていく努力を、死ぬまで続けていかななくてはならない。そうでないかぎり、人は、ものをかくことの喜びを知るところか、ものをかけないことの悲しさにさえ、ついに気づかないまま朽ち果てるであろう。ものをかくということは、人間変革の原点を探り確かめるためのものだということに、熱い思いをこめよう。

私の場合、「授業通信」を発行してともに学ぶよろこびを追求してきた。⁶⁾ 4回生の学生は、授業の総括で次のような報告をしてくれた。「保育内容の研究 健康」のレポートから一編だけ紹介しよう。

「生きる」ということは、当たり前のことのように、非常に疲れる、しんどいことのように思います。幼い子どもたちや、身体に障害を持つ人達にとっては、身体を動かすこと自体、大変なことです。身体が自由に動く私達でも、その状態を維持することは大変だし、勿論、身体のことばかりでなく、今の世の中、精神的にまいっていました。この世の中は、私に向いていないから生きていくのはしんどい、とっていました。しかし、そんな私に先生は、「世の中には、こんなに大切なものや輝いているものが沢山あるんだよ」ということを教えてくれたように思います。大切なことをひとつ知る度に（「気付く」という言葉を使う方が適切かもしれませんが）「生きることから逃げてはいけない」と感じました。教えることの大切さ、教わることの大切さ、気付くことの大切さ、抵抗することの大切さ、ちょっとした気配りや、毎日の小さな感動や、懸命な努力や……書けばきりが無い程、大切なことは確かに存在しています。

私事で恐縮なのですが、万喜雄先生も御存知の通り、教員採用試験ぎりぎりになって私も「後ろまわり」が出来るようになりました。試験当日も、一度でまわれ、思わず涙が出てしまいました。私の友人は後ろまわりが出来た時、「人生が変わった」と言いました。大げさでもなく、正直な心からの言葉だったろうと思います。実際、私もそうでした。何だか何でも出来そうな気分になり、さくらんぼ坊やたちに少しだけ近づけたような気さえしました。しかし、人間というのは本当に不思議なものです。毎日、数えきれない程のニュースや情報を見聞きし、大学では先生が、一生懸命講義をして下さっているのに、それらについては感動や共感こそすれ、「人生が変わった」と思える程のことには、なかなか巡りあいません。万喜雄先生のお話は、それらの中では群をぬいて私の心を引きつけますが、やはり、後ろまわりの出来た、あの瞬間にはかなわないような気がしてしまいます。今考えてみれば何だか笑ってしまいますが、それでも久しぶりに心から充足感を味わいました。一度は、あきらめかけたことただけにうれしさもひとしおでした。

こういった経験をしてから、私も子どもたちにあの後ろまわりが出来た時に私が感じた気持ちや味わわせてあげたい、と思うようになりました。いろいろな人の力に支えられて出来るようになり、その支えの大切さに気づく中で、今度は私が支える番になりたいと強く思うようになったのです。人の支えになるというのは難しいことです。度を過ぎれば押しつけになってしまい、かえって人の負担になってしまいかねません。じゃあどうすれば良いかと言われたら明確な答えはまだまだ出せませんが、私は常々ああしたい、こうしたいということ

よりも、まず自分をあらゆる面で磨いてゆくことが大切だと思っているので、今回の授業で学んだことを含めて、これから増々、様々なことを学んでゆきながら、じっくりと成長してゆきたいと思います。

これからの世の中は、大変な時代をむかえ、何が起こっても不思議ではないような気さえしてしまいます。しかし、それだけに大切にしてくべきものも沢山あると思います。何が大切か、何が真実かを見極める厳しく確かな目と、ささやかな幸せや、わずかな輝きをも見ることの出来る、ゆとりのある澄んだ目を持てるような人間になりたい。本当の意味で学び変わってゆくのは、これからです。(章子)

2 青年とともに授業をつくる

青年たちは、人生の輝きのきっかけをどうつかもうとしているか。私の経験では、青年たちはなにかしら人生への情熱と、現代社会の切り口が見え、生き方を考えさせられる話を待っているように思われる。しかし、現代のやさしさ世代は、熱い人間関係が苦手なようである。それ故、大平健の指摘は傾聴に値する。

「旧来の『やさしさ』とは、相手の気持を察し共感することで、お互いの関係を滑らかにすることでした。

一方、新しい“やさしさ”では、相手の気持に立ち入ることはタブーです。相手の気持を詮索しないことが、滑らかな関係を保つのに欠かせません。」⁷⁾

お互いを傷つけない“やさしさ”にも留意しながら、私はともに生きる授業づくりをめざして、次のような青春メッセージを伝えるのである。

第1は、青年の意欲とか積極面は見えにくい。逆に否定的にみえる現象の中に肯定的なものへの芽生えを見い出す目がないと、青年をつかまえて損なう。

第2は、私たちが働きかけると、最初はある種の拒否反応がある。そこで「やっぱり今の若者は……」と言ったらそれまで。「そう育てられてきているんだ」という認識があればたじろがないですむ。

第3は、若い女性の中には、断定はしないし、結論は出さないが、あいまいに言いながらも方向性だけは出す、という表現方法をとる人もいる。そこには、人との関係においてシビアに対峙したくないという「気疲れ世代」的な発想がある。

第4に、親たちの世代は、「自分は人とここが違う」ということで安心する。今の青年も基本的には同じはずなんだけど、表面的には限りなく他人と同じであろうと演じる。

第5は、「別に……」とソッポをむかれるのではなく、要求をはっきり言ってもらえる関係をつくることが大切である。それを受けとめる側に自信と力がないと、お手上げになる。

大学の授業で書くことを大事にしていると、いろいろな感想文に出会う。一見、陽気に見える彼らの内面をのぞくと、その明るさとは裏はらに、悩む姿が浮かびあがってくる。そんなとき、一人で悩むより心許せる人に相談した方がいい。よほど辛かったのだろう。まるでつぶやきのような迷いを綴った学生がいた。

「僕の家は両親が離婚したので、今、母と妹が二人っきりで九州に住んでいます。母は、小さなスナックを営み、妹は高校1年生になったばかりです。僕が愛媛に来るまでは一致団結していたのですが、僕と妹の受験がそれぞれ良い結果に終わり、僕が家から抜けると妹が変わってしまったようです。最近、母から相談の電話が度々かかるようになりました。

夜、母がいないのをいいことに、妹は帰りが遅くなったり、無断でバイトを始め勉強がおろそかになり、成績は赤点ばかり。母は、日頃さびしい思いをさせているから、その上怒るのはかわいそうという始末。僕は帰省する度に怒るのですが、全く効き目がなく、僕のいる間だけ、いい子ぶっています。一体どうしたらよいか……」

感想文とはいえ相談された内容は、きき流すことが出来ない。次週、授業を終えてじっくり話し合った。1時間にわたる対話の中で、私は次のような話をした。

「君は兄だ。父親代わりになるのはやめた方がいい。説得よりも納得。まずは妹さんの気持ちに共感して、その上で彼女の“ツッパリ体験”をプラスにする道をいっしょに考えたらどうか。今以上にあてにしたらい。賢い人だもの、自分で納得すれば、やがて軌道修正をするにちがいない。」

この願いが届いたのか、その後、妹さんは立ち直ったそう。教師の仕事というのは、こんなちょっとしたことで喜ばれるのを支えにするのかもしれない。相談者の悩みを考えることで、自分自身が人間的に成長していくようである。

3 青年たちへの贈り物

ともに授業づくりに参加してくれた学生諸君に、次の詩を贈り、励ますことにしている。題して「人間のうた」⁸⁾

人間のうた

深澤 義旻

「うそをつくな」と、おれはいわない。
大事なときに、うそをつかなければいいのだから。
大事なときは、
自分を不幸にするかどうかというときだ。

「くそまじめにやれ」と、おれはいわない。
くそまじめにやって損をすることが多いからだ。
だけど、やらなければならないときは、
どんなにつらくても、苦しくても、
やりぬかなければならない。
それは、自分をだめにするかどうかというときだ。

「けんかをするな」と、おれはいわない。
つまらないことではなければいいのだから。
つまらないけんかとは、
みにくい感情の剥きだしのことだ。
そこからは、なんにも生まれてはこないのだ。
だから、けんかは、つとめて避けるがいい。
だが、始めたら、
相手の息の根が止まるまで、

もしくは、
相手が完全に「まいった」と音を上げるまで、
やめてはならない。
なまはんか、相手に同情して、
手をゆるめたら反撃されて、こちらの負けだ。

「だれとでも仲よくしろ」と、おれはいわない。
ほんとうのなかまと、仲よくできればいいのだから。
ほんとうのなかま——とは、
手をにぎりあい、肩を叩きあいながら、
自慢話をしあえる相手のことだ。

「いつも誰にも素直でいろ」と、おれはいわない。
素直になるもならぬも、
それは相手によりけりだ。
言ってることはほんとうか。
それは、ほんとうによいことか、よくないことかを、
よくよく確かめてからにしたらしい。
たとえ、どんな相手でも、決して、
おそれず、ばかにしないでだ。
相手の目つき顔つき、ものの言いかたを、
おちついて、よく聞き、見ていれば、
たいがいピンとくるものだ。
人に対する無条件な素直さではなく、
真理に対する素直さをもつことだ。

「まちがいや失敗をするな」と、おれはいわない。
大事なことをまちがえなければいいのだから。
大事なことで失敗しなければいいのだから。
まちがいや失敗をおそれてはならない。
おれがいう大事なことは、
二度と立ち上がれなくなるかどうかということだ。
意志と体力で支えきれなくなるかどうかというときだ。
他のまちがいや失敗は、
星の数ほどあったにしても、
少しもこだわることはない。
まちがいや失敗から正しく学んでいくかぎり、
自分を高めていけるからだ。
まちがいや失敗を一つもしない人間は、
結局、なんにもしなかったやつなのだ。

口先だけで、何もできなかったやつなのだ。

「いつも正しくあれ」と、おれはいわない。
神様にも動物にもなれるのが人間だから。
正しく美しいものに感動しながら、
悪いことをまねるのも人間だから。
喜びと悲しみを同時に受けとめることができるのも人間だから。
いつ、どんなときにも、
うんと喰って、うんとたれて、うんと眠るがいい。
獣の眠りのように眠るがいい。
そして、また、力を合わせて働こう。

「親に心配かけるな」と、おれはいわない。
心と體が丈夫なやつほど、
何かをしなければいけないやつなのだ。
そうであるかぎり、何か、どこかで、
親に心配かけるにちがいないからだ。
親を喰らいつくして
思いっきり勇ましく生きてゆけ。

幸せは祈って待ってるものじゃない。
戦いにとっていくものだ。
自分の弱さや醜さと戦いながら、
目的と目標をしっかりと決めて、
それに向かって突進していくときに得られるものだ。
それが自分を大切にすることだ。
自分を大切にすることをためらうな。
自分を大切にできないでいて、
どうして、人を大切にできようか。
自分を大切にすることが、同時に、
人を大切にすることになる生きかたを、
なんとしてでも、
見つけ出し、つくり出さねばならぬのだ。
それは、人間にだけできるのだ。
それが、人間の権利であり、義務なのだ。
そのように生きていったとき、
おれたちのまわりにも、
人間らしい人間がいることに
きっと気づいていくはずだ。
ほんとうのなかまもできるのだ。

そのことが、そうして生きていくことが、
どれほど苦しく悲しく切なくても、
自分の意志で選んだ道を、
もうひき返さないぞと覚悟して、
歩み続けていくならば、
悲しみも、苦しきも、怒りも、
人間の誇りにかえていけるのだ。

雨が降っても、
曇っていても、
見ろ、
雲の上には、太陽がある。

おわりに

「人間の健康とは、人間的諸活動——労働，社会的活動，学習・発達，人生の享受——を行うことが可能な，身体的，精神的，社会的状態である」⁹⁾

日野秀逸の定義するこの健康観を支持する私は、子ども・青年の現実を見つめながら生きるよろこびを求めて、人間讃歌の健康教育を模索してきた。不安な時代、大学においても一人ひとりがその気になって、他人との関係の中で選りながら自分の持ち味をつくり出していくのを助ける教育の仕事は、より重視されていいのではないかと考える。

学生たちが講義に求めているものは何か。経験的にいえば、●わかりやすさ、●おもしろくてためになるもの、●参加しているという実感がもてるもの、●自分と社会そして未来が見えてくるもの、●人間としてともに生きることの喜び、●知っていたことが生きたものとしてよみがえること等を求めている。わかりやすさに応えようとする私は、健康とかかわらせながら表現した自己形成史のレポートを重視してきた。つまり、概念と体験の結びつきを深め、同時代を生きる青年の人生体験を伝えるように心がけてきたのである。これらの報告はこれからも、静かに、ゆっくり、ていねいに伝える価値があろう。

なお、本報に収録した2編の高校生感想文は、山口県立佐波高等学校の生徒のものである。「生きるよろこび」について話をさせていただいた佐波高校および養護教諭の池田久江先生にはお世話になった。記して感謝申しあげる。

引用・参考文献

- 1) 拙稿「健康教育試論 第1報」『愛媛大学教育学部紀要』教育科学第36巻 1990年
- 2) 吉野弘『吉野弘全詩集』所収 青土社 1994年 p.68
- 3) 森智子「たんぼぼ通信」第21号 1992・93冬号
- 4) 星野富弘『風の旅』立風書房 1982年 p.62
- 5) 深澤義晃「鉄筆のうた」中野光『戦後の子ども史』所収
- 6) 拙稿「大学における保健の授業研究——授業通信による対話の教育」『教育保健研究』第7号 1992年
- 7) 大平健『やさしさの精神病理』岩波書店 1995年

- 8) 深澤義旻『教師たちの詩』日本評論社 1989年 p.216~223
- 9) 日野秀逸「医療と人間観の変化」『教育』№592 国土社 1995年 p.106